小学生2人が〝デビュー〟

北浦町　三川内の市尾内神楽

延岡

延岡市北浦町三川内市尾内地区の天満宮で17、18日、霜月祭典があった。市尾内神楽保存会（戸高久文会長）は17日夜に、神楽十三番を奉納した。保存会の会員23人に加え、今年は2人の新戦力が元気な舞を見せた。

矢野斗翔＝とわ＝君（佐伯市立切畑小2年）と、富山千裕君（延岡市立岡富小1年）。2人はそれぞれ父と母が同地区出身で、毎年見学に来ていた。この1カ月は週6回、市尾内に通い猛特訓。地域の人に手取り足取り教えてもらってこの日を迎えた。矢野君は「100%覚えた。2人でやっているところを見てほしい」。富山君は「頑張って上手に舞いたい」と舞台に上がった。

地域一体となって、小学生から高齢者まで舞い手を務める神楽で、2人が舞った「くりおろし」は、登竜門的な一番。久しぶりに小学生が舞い、訪れたゆかりの人たちが大いに盛り上がった。

富山君の祖父戸高会長は「佐伯からも毎日来て一生懸命練習してくれて、ほかの会員の刺激にもなった。保存会として年々、チームワークも技術も上がってきた。（課題は）次世代の育成だが、今の人たちが一生懸命やることで、次の人は出てきてくれる」と話していた。

「くりおろし」を披露する矢野君（右）と富山君＝17日、市尾内地区の天満宮

記者手帳

2018・11・21

稲わらを束ねた「亥の子ぼて」を持って子どもたちが地面にたたきつける。豊作に感謝し、無病息災なども祈願する亥の子祭りだ。先週は延岡市北川町深瀬と復活させた塩浜町で行われた。

▽　▽

伝統行事として続ける深瀬地区は昔ながらに子どもが家々を回っては庭の地面をたたく。田の神の大黒さまに感謝する農耕祭事で大黒さまが農耕の仕事を終える旧10月の亥の子の日に行っている。昔は広く県内各地で行われていたが、もともとは全国各地で行われた日本の代表的な収穫祭。場所によっては大黒さまが違う神様だったりもする。

▽　▽

「歳時記の系譜」（鳥越憲三郎著）によると、「亥は陰がきわまって陽気がきざすものと考えられていたので、亥の月の亥の日を玄猪といって祝った」「その日に餅を食べると病を除くという俗信が古くから中国にあり」それが平安期に日本に入ってきた。亥は猪であり、たくましく多産であることから豊作、繁栄を願いに込めた。全国で稲の収穫時期が違うため、関東などでは10月10日に行い名前も「十日夜」と言う。

▽　▽

高千穂地方でも昔は10月の初亥の日に作った亥の子だごを神仏に供えた。その団子をその日の亥の刻（夜9時～11時）に食べると、健康で幸せになると言われていた。子どもたちのお目当てはこうした団子などのお菓子。以前取材した時も深瀬の子どもたちは、お菓子をもらい笑顔だった。そこは、月見行事や今風に言えば大流行のハロウィーンと同じである。（I）

2018. 11. 21（水）